
明るい生活

田中ケンスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明るい生活

【Nコード】

N7241B

【作者名】

田中ケンスケ

【あらすじ】

いかに明るく生きるかは、いかにイカした発想が出来るかに他ならない。そんな発想から、コラム書いてみることにしてみたよ。だって明るいって、楽しいじゃん！違うかい？さてさて、一週間ごとくらしいの更新を目標に、連載してまいります。どこまで行けるか、お楽しみに〜。

第1話 あつたらイヤな料理

「究極にウマイけど、65%の確率で死ぬ料理」

こんな料理があつたら、イヤである。

凄く美味しいのだが、食つたら65%の確率で死ぬのである。

しかも“味見だけ・・・”などと言う又ルい試しは許されない。

最高の味をもつその料理は、舌で触れたら最後。確実に65%の確率で死ぬのだ。

さて、皆さんならどうします？

コトの発端は友人との会話だった。

「なあ、あつたらイヤな料理ってどんなのかな？」

僕の言葉で論議が始まった。

「あつたらイヤな料理」と聞いて大抵の人たちは虫や爬虫類の料理を揚げてくるに違いない。現に友達もそうだった。

タガメの味噌汁、カマキリの天ぷら、ヘビの蒲焼など。とにかく虫や爬虫類の料理を連発してきた。

しかし僕はそれらを食うコトには抵抗が無いので、別にイヤではないのだ。

むしろカマキリが食べられる機会があつたら、是非とも食べてみたいし、ヘビの蒲焼なんてウナギと大して形が変わらないのだから構いはしない。もしかしたらウナギよりウマイかも知れない。

「そりゃ、おめエ。その気になりや何だって食えるだろうよ」

友人はそういつて眉をしかめたが、現にそういうモノを食う文化があるのだから、虫食いや爬虫類食いが笑われたり、蔑みの対象にな

るのはおかしい。

現に日本人は生で魚を食ったり、生卵を食ったりしているではないか。

事実これはら外国（特に西洋）から見たらトンデモないゲテモノである。

さて、僕がそんなスタンスだったお陰で「あつたらイヤな料理」は早くも頓挫してしまった。

つまりどんな食材を提案されても「ま、食い物だしね。食えないコトはないだろ？別にイヤでもないかな」となってしまうのだ。

虫と爬虫類以外となると、残るのは石とか土になってしまおうが、これらは既に食い物ではない。

食材での議論は限界と悟った友人と僕は、続いてビジュアルにこだわった。

例えばトイレ型の器に盛られたチョコソフトや、しびんに入ったビールなどである。

たしかにイヤな料理ではあるが、いまひとつパツとしない。

こんなレベルなら「ひょうきん族」あたりで既に試しているだろう。

それに必ずしもイヤな料理かと問われると、疑問である。

料理自体がウマければ、イヤさ加減が個性として名物になりそうだと本末転倒である。

もうネタも出尽くして、この話をやめようかと思ったそのとき、冒頭の料理が僕の脳裏をよぎったのである。

「究極にウマイけど、65%の確率で死ぬ料理」

自分で言うのも何だが、これは凄い。

この世のどんなモノよりもウマイのだが、65%の確率で死ぬのだ。微妙に死ぬ確率の方が高いところがミソである。

食って死ななかつた人に話を聞くと、「あれはマジでウマイ。本当に死ぬかと思うくらいにウマイって」というシャレにならない回答が返ってくるのだ。

これが例えば「ウマイけれど絶対に死ぬ料理」とかだと、誰も挑戦しない。

そもそも「ウマイけれど絶対に死ぬ料理」を食ったヤツは死ぬんだから、どんな風にウマイのか、それ以前に本当にウマイのが分からない。

ただ分かってしていることは、その料理を食うと確実に死ぬ。という余りに理不尽な事実だけだ。

何だか「最期の晚餐」みたいな感じで、安楽死に使われそうでちょっとイヤだ。

翻って、「究極にウマイけど、65%の確率で死ぬ料理」は生きる希望があるので明るい。死ななかつた場合はもちろん後遺症や副作用などは一切ない。

運がよければ45%の確率で、この世のあらゆるものを凌駕した究極のウマさを体感出来るのだ。ただし言うまでも無く65%の確率で死ぬ。

ここが思案のしどころである。致死率が65%なのは、それだけのリスクを負ってでも食べる価値のあるウマさだからである。

勇気や運や人生やら。

色々なものを賭けて挑むこの料理は、海原 山もオドロキの究極の料理である。

きつと食った者はその瞬間「ぬうつ！」と声を上げ、背後に稲妻が走るに違いない。

平らげた後は、死ぬか生きるかを天に任せるのみだ。

何だか食事と言うより勝負ですな。

そしてこの料理が、もし本当に存在したらどうなるのだろう。

ちよつと日記だけでは物足りなくなってきたので、これをテーマに物語を作ってみようかな……。などと考えてしまったのであった。

第2話 下着と水着の違い（前書き）

下着と水着。

似て非なる二つを分かつのは、一体何か。

第2話 下着と水着の違い

水着と下着の違いは何だろうか。

図らずも世界水泳が巷のテレビを賑わせているとき、こんな深遠な
想いがアタマをよぎってしまった。

解決したからといって「チョー気持ちいい！」「ワケでもないのだが、
ボクは気になって気になって仕方がない。

片や見られると恥ずかしい下着。

片や見られるとうれしい水着。

両者は見た目だけでなく「肌に密着し、局部を隠す」というところ
まで共通している。

それなのに、その先の扱いが正反対なのだ。

まあ、素材などの観点から見れば細かな違いがあるのだろうが、少
なくとも下着を水着代わりに利用する事は可能だし、その逆も然り
なのである。

その上、水着も下着も肌の露出度は大して変わりゃしないワケで、
中には下着を上回る露出度の水着だってあるのだ。

冒頭で述べた世界水泳の水着には納得ができる。

あの水着。実は表面に微細なミゾが掘り込まれているのだ。

そうすることによって、いわゆる「サメ肌」を人工的に再現。泳ぐ
際の水抵抗を少しでも軽減する役割を担っているのだ。

彼らの装着している水着には「少しでも速く泳ぐ」という重要な存

在意義があるのである。

翻って、パンピーの水着はというと、下着とさほど変わらぬデザインである。

仮に下着が水着売り場に置かれていても「最近のトレンドなんですよ」などと店員に言われたら、マイのカードと共にレジへ出してしまいそうだ。

そう考えると両者間には明確な線引きが無いといえる。

「機能が違うではないか」と反論してくる方もいるかもしれないが、濡れることを前提に開発される水着はそのキャラ上、吸湿速乾性に優れた素材で作られる。

つまり、「すばやく水分を吸い上げ、すばやく乾かす」というモットーで開発されるのだ。

これは下着以上に下着に適した素材なのである。

それでは両者を下着、水着と分けている線は一体何なのだろう。たぶんそれは「心の持ちよう」なのだと思う。

つまり、下着と思って着れば下着だし、水着だと思って着れば水着になるのだ。

そして下着と思って着ている着衣は公衆の面前にさらすと恥かしく、水着だと思って着ている着衣は公開OKなのである。

おお。デザイン性にも機能性にも差がない二つの着衣は、僕らの心によって存在を二分されていたのだ。

そう考えると、僕らの日常は「下着か水着か」という状態が非常に

多いコトに気づく。

下着か水着か。に始まり、
楽しいか楽しくないか。
好きか嫌いか。
生きたいか死にたいか。

そしてコレらは心の持ちようで、十分に変える事ができるのだ。
「オーラ」や「運氣」または「殺界」という名前のこれらも、よう
は心の持ちようの変化形なのだと思う。
「一生に一度の大運氣です！！」などと言われたら、そりゃ誰だっ
て毎日がばら色になろう。
なにせそついう心の持ちようになっているのだから。

いやあ。

世界の生きている世界がどうなるかは、自分の心の持ちようなので
すな。

ということだ。「毎日が楽しくない」と嘆いてるあなた。
ためにココは一つ、「現状打破」という意味でも下着を水着とし
て着て見るのもイイかもしれない。
今までと違う世界が見えてきて、心の持ちようがイイ方向へ進むか
もしれない。

なお、それによって警察のお世話になっても、ボクは一切の責任を
負わないので、悪しからず（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7241b/>

明るい生活

2010年10月17日07時37分発行